神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

翻訳・母語日本語とロシア語の狭間で：言語意識とメンタリテイ

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2004-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 村上, 光昭, Murakami, Mitsuaki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/786

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳・母語日本語とロシア語の狭間で

——言語意識とメンタリテイ——

村　上　光　昭

ここで日本語とロシア語の転換するにおいての問題点を検討する。ここではロシア語の文献を読んで新たな情報を提供しようとするのではなく，新たな試みをしようと思う。しかしロシア語の記述文法，規範文法を持ち合わせていることを前提とするし，英語の知識をも前提とする。ことばを操る日本人がどうロシア語（や外国語）に対処するかという問題点である。これは，また逆に，おそらくはロシア人が目標外国語に対処する時に生じる様々な問題があろうと思われる。また余儀なくされたといえ母語のロシア語を離れて英語で創作した作家詩人の例も，二国語間の転換の問題として検討する。これらは日本語を出発点とする日本人の意識の具現化，母語日本語の構造をどう外国語化，ロシア語化するかと，ロシア語を出発点とする日本語意識を持った日本語，これに日本語人とロシア語人のそれぞれの対象言語に対する転換上の問題点を扱うことである。

対照言語学では構造的に対置し，各レヴェルでの対応をみて，異同を示す。そこから見える言語行動に及ぶときには，語用論的とされてある限定的状況での表現の可能性と異同を見る。この場合には動的側面が導入されて，それなりの機能性が明確になる。しかし，動的側面が全体として提示できるかといえば，きわめて限定的になる。すなわち，言語運用場での機会，状況の分類によってその方向性は決定されていく。

専門的に言語を研究する場合の限界があるものの，領域を限定しての高度の専門性と，記述の精度が問題視されることになる。ここでは，分け方にその原則性が露わになることになる。

記述文法と機能文法・語用論については，記述文法の限界は精度を上げることにおいては限度がない，しかし実体を取り出し命名し整理することが重要であるかのような感がある。またそれが精緻を極めればなおさら肯定的に見られると言うこともある。

精神活動の基盤として言語による情報の発現とその流通。

対象言語の世界に入り込み，つまり探検し，研究対象を発見し，その知見を報告することになる。これは異文化世界の情報の流入あるいは輸入であって，その学的水準に倣うことである。従って専門分野によっては，情報の取り出し，適用の程度の差は歴然とある。しかし流入といえば，無制限であり，それは研究者の関心の程度と頭の数の問題である。まさにここに現れるのが研究者の属すところの文化成熟度に頼るところである。また標的となることばが流通するところの政治経済文化歴史の影響力に左右される。そんなことには一向に左右されずに先に進んで，言語とそれを担うもののメンタリテイ，異言語と母語の関連を見ていく。

ここでは一般的な知識や文学テキストを問題にし，上のような考えがどこまで成立するのか，いくつかの日本語テキスト断片を検討する。そしてその言語構造構成においての日本人の癖かメンタリテイをかいま見ることにする。

日本語人として母語における意識の流れを言語化する。そこに現れたものは日本語意識としての日本人のメンタリテイの実体化か。これは普遍的であるのか，いや個別的であるのか。限定的であるが様々な時代の作家の文体を

見てみよう。以下に見るテキスト断片中で下線部や太字部は筆者のものであり以下に述べるに要す便宜上のものである。一葉以外はテキスト冒頭部であり，読ませるべき技法が個人的スタイルとして現れている。ここでは，内容を問題にすることはなく，日本語意識の構成の問題として扱うのである。

1）

なにも別だん斜に構えて無関心を誇示する必要もないし，軽蔑や敵意をちらつかせつつ批判めいた言辞を弄するほどの興味もないのだから，たとえばそれが世界に存在してしまうことを不当だと断じようとは思わぬが，さりとて積極的に好きになる理由も発見しがたいといった料理とか人の顔とか，とにかく曖昧にその脇をすりぬけてしまえばそれで充分だと納得しうる種類の何ものかの一つとしてテレヴィジョンと呼ばれる装置があるわけで，まあいってみればすべては趣味の問題に帰着しうるとするほかはないのだが，たぶん倖いなことにというべきだろう，妻もまたさりげなくその無関心を共有してくれるので，テレヴィジョンへの執着の稀薄さは，もちろん「比較的」というほどのことだが，われわれの子供のうちに遺伝として確実に受けつがれている。というか，当年九歳になる一人息子は，両親との類似を装う術をしかるべく心得ていて，いまのところは反乱の気配すら示そうとはしない。（蓮見重彦―あるイメージの記憶―冒頭）

有意味語として，機能語として二字漢字語が用いられ，重々しさを感じさせるものの，別だんというより，一方的スタイルにもかかわらず，文と文の接点に現れる，「し」，「の（だから）」，「こと」，「が」，「ば」，「わけで」，「（とするほかない）のだが」，「（という）（ほど）の（こと）だが」，「というか」，「は」，「とは（しない）」。そのほかは挿入語的表現，「たとえば～」，「さりとて～といった」，「まあいってみれば」，「もちろん」である。ことさらに単文を避けて，単文を連ねて長文にしていくという典型的な日本語のスタイルの衒学的表現例である。留保を多用するのは，意識の対流，伏流が見え隠れする。なぜそこまでするかは，個人的意識の具現だと言っておこう。

2）

モモイさんにとり憑かれたのが去年の７月である。

去年の７月といえば，久しぶりに行ったトレッキングで腰をいため，誕生日検診で胃潰瘍の初期と診断され，四十歳になって親しらずが突然生えはじめたので抜くべく歯科医に行ったはいいが医師の腕が悪く出血多量であやうくショック症状をおこしかけ，それら諸々のことをなんとか

やり過ごしほっと一息ついているころに，ささいな理由から五年ごしの恋愛関係にあった妻子持ち・十歳としうえの井上と別れたという，多彩といえば多彩な，七月だった。（川上弘美―どうにもこうにも―冒頭）

きわめて興味深い現代の文体である。「七月といえば，～，七月だった。」この内部にかくも述べたてたいことが鬱積するのは驚嘆すべきことである。しかし日常的には，これほどでなくても錯綜した文が介在することはある。介在した文の接点は，句点がない場合もあるが，連用形としての接続形や（母音 -e で終わる），「といえば」，「ので」，「は」，「が」，「し」，「ころに」，「という」などである。また文末は名詞文の体裁を採る，「だった」である。

3）

風呂から上がってビールを飲み，「巨大烏賊の逆襲」というテレビ映画を見ていたころ，だしぬけに仲居が部屋に入ってきて，烏賊の酢味噌和え，烏賊のフライ，烏賊ソーメン，なんて烏賊ばかり，不足たらしい顔で座卓の上に並べるので，その手元を黙って眺めていると，「今日はお客はんたて込んで往生したわ。ちゃつちゃっと片づけとくなはれや」と，紺色の民芸調暖簾をかき分けて婆あが顔をだした。（町田康―人間の屑―冒頭）

この強烈なリズム感のある現代の文は明快である。しかし単文を連ね，様々な接続形を用いて一纏まりの文となっているのは上の例と同じである。見られるのは，連用形としての接続形，「という」，「ので」，「と」である。また引用文を方言表現「ちゃつちゃっと」，「とくなはれや」が特に効果的である。

4）

人間というのは因果なもので，善いことと悪いこと，やってどっちが面白いかといえば，それはもう絶対，悪いことをする方が面白いのであって，それはいかんじゃんか，ってことになって，昔の偉い人がいろいろ苦労して，まあ，だいたいこういうことはやっちゃいかんよ，という基本線を決めたんだけれど，決めた人が死んだ後，それはやっちゃいかんよ，なんてって，みんなに言って回る人は大して偉くないから，説得力がないというか，何でこんな奴に言われなきゃなんねえんだ，むかつく，ってことになって，やっぱりみんな善いことより悪いことをしてしまう。（町田康―善悪の彼岸―冒頭）

この作家の明快なリズムを持ったビートの日本語はさながらロック音楽を聴くがごとくである。内容は別にして，機能語「こと」「もの」，同音の反復，

「ん」音，「い」音の多用，促音「って」およびその反復「やってどっち」「決めたんだけれど，決めた～」がそれを想起させるのだ。これらがリズムビートを効かせ心地よい日本語になっているのだ。これほど音の美しい日本語は滅多にお目にかかれない。

5）

ありし梅見の留守のほど，実家の迎ひとて金紋の車の来し頃よりの事，お美尾は兎角に物おもひ静まりて，深くは良人を諫めもせず，うつうつと日を送つて実家への足いとどしう近く，帰れば襟に腮を埋めてしのびやかに吐息をつく，良人の不審を立つれば，何（どう）も心悪う御座んすからとて食もようは喰べられず，昼寝がちに気不精になりて，次第に顔の色の青きを，一向きにて病気ばかり思ひぬれば，与四郎限りもなく傷ましくて，医者にかかれの，薬を呑めのと恪気は忘れて此事に心を尽くしぬ。（樋口一葉―われから―（五）より）

この明治の文体は基本的に現代にまで持ち越された日本語の特徴といってよい。それはこれまでの例で見た，単文を連ねあわせて，一纏まりのテキストにしてしまう。この明治の文では名詞止め，それが正書法の無分明な時代の形跡が見られる。句点は一纏まりテキスト成立時に打つものであり，読点は単文中止形であると見ることができる。特にこの時代の「のほど」，「の事」「とて」は現代にいたりさらに抽象的機能語として働くようになっている。もちろんここでも機能語ではあるが，単文末の名詞止め的作用をしながら，接続形に移行している。さらに連用形としての接続形，「れば」，「から」，「の」，「のと」が接続子として現れている。

6）

越後の春日を経て今津へ出る道を，珍しい一群れの旅人が歩いている。母は三十歳を踰（コ）えたばかりの女で，二人の子供を連れている。姉は十四，弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて，草臥れた同胞二人を，「もうじきにお宿にお著きなさいます」と云って励まして歩かせようとする。二人の中で，姉娘は足を摩るようにしてあるいているが，それも気が勝っていて，疲れたのを母や弟に知らせまいとして，折々思い出したように弾力のある歩附きをして見せる。近い道を物詣りにでも歩くのなら，ふさわしくも見えそうな一群であるが，笠やら杖やら甲斐々々しい出で立ちをしているのが，誰の目にも珍しく，又気の毒に感ぜられるのである。（森鴎外―山椒大夫―冒頭）

これは同じ明治のテキストであっても，一部の漢字を除くと，現代の文であるといっても全く抵抗がない。その理由は明快な単文構造が，句点で明快に示されていること。一文一文理解を進め，物語の姿が明快になっていく。これはとても不思議なことだが，これまであげた文構造に対峙的な明快さを備えているのである。推察するに鴎外こそ独逸留学でそこで生活し，文学までも翻訳しており，言語が明快であり，単純な上に，技巧に富んだものであるべきという意識を持っていたのであろう。

7）

ここに学者なるものがあって，突然声を大にして，それは明らかに矛盾である，どっちか一方が善くって一方が悪いに極まっている，あるいは一方が一方より小さくて一方が大きいに違いないから，一纏めにしてモッと大きなもので括らなければならないといったならば，この学者は統一好きな学者の精神はあるにもかかわらず，実際には疎い人といわなければならない。現にオイケンという人の著述を数多く読んでおりませんが，私の読んだ限りでいえば，こんな非難を加えることが出来るようにも思います。こう論じてくると何だか学者は無用の長物のようにも見えるでしょうが私は決してそんな過激の説を抱いているものではありません。学者はむろん有益のものであります。学者のやる統一，概括というもののおかげで我々は日常どの位便宜を得ているか分かりません。前に挙げた進化論という三字の言葉だけでも大変重宝なものであります。しかしながら彼ら学者には凡てを統一したいという念が強いために，出来得る限り何でも蚊でも統一しようとあせる結果，また学者の常態として冷然たる傍観者の地位に立つ場合が多いため，ただ形式だけの統一で中身の統一にも何にもならない纏め方をして得意になることも少なくないのは争うべからざる事実であると私は断言したいのです。（夏目漱石―中味と形式）

現代語ですよといっても良い明快な話し言葉での講演テキストである。時代を隔ててもこのように明快であったというのは，やはり漱石も英国留学をして言語に対して敏感であったと言ってよい。現代においてこそこのようなスタイルを手本とすべきである。この段階に至れば，つまり明快な内容を伴った日本語を操ることができれば，それが逆に，鴎外や漱石の日本語文体を手本として，明快な外国語に至れるはずであると思うのである。

では上の日本語にみえる抽象化，機能語できわめて重要な役割をするのが

名詞化操作であるとみてとれる。これに至るにその基に，事，所，時，頃，程といった名詞の抽象化である。一葉の時代にはいまだたとえば「事」として用いられたが，それがひらがな表記になるとともに抽象化が完成し，機能語となったのである。さらにこれらに，「こそあど」語が付加され，より広く用いられ，これ全体が格助詞と結びついたのである。日本語が本来的に持つ特徴，終止形が全く連体形と同形なのである。これで多重の埋め込み文が前置されていく。これをさらに保証するのが，「の」という格助詞のさらなる抽象化である。これ自体が前の文自体を体言化するのである。残余は「だ」，「です」という名詞述語で文を完結させる手段である。「Nだ」，「Nです」が成立する限り，「～は」と取り上げた項が，被限定項として働き，あとは，最後に限定項を待つのみで，文は成立するという基本的構造が成立しているのである。つぎにテキストの中断と進展を確保する，連用形としての接続形，エ音形，およびシ音形と接続詞の「が」である。これらの根幹的枠組みを成立させるメカニズムが，単文で終わるにもかかわらず，これまで見たように，単文を連接させて，さらに名詞化を取り入れ，長い一纏まりの文を易々と成立させるのである。

だが，一概にそうはいかなくなっているのが，現代の日本人のメンタリティであろうか。あるいは現代人の心理が色濃く刻まれる文体を造出したのだろうか。日露の小説に見る文体を対照してみよう。

文体は個人のものであるから一概には比較しても詮無いことであるかも知れぬ。ここでは書き手も自分のことを棚に上げてはいけない。そのような構造になっているのがこの文体という問題である。かつて文体とは思想だと言った先人がいた。次の二作品は，いずれも書き出しで，現代日本の2000年の文体とソヴィエト時代1970年のロシア人の文体のサンプルである。太字や下線部は筆者のものでこれについては後で言及する。

タマヨさんに会いに三島まで行った。

明日が大晦日という日で，東海道線鈍行の下りはずいぶんすいていた。朝から何も食べていなかったので，タマヨさんへのみやげにと小田原で買った笹蒲鉾の袋を一つ空けて，五本のうちの二本を食べてしまった。しばらくしてお腹が減ってきたので，もう一本食べた。

タマヨさんは，封が開いて二本しか残っていない袋の混じった笹蒲鉾の包みをみやげにと手渡しても，頓着しないたちである。すくなくとも最後にあった十数年には，頓着しないたちであった。今はどうなっているか分からぬが，人間のたちが十年くらいでそうそう変わることもあるまい。ただし，もうしばらくたってさらにお腹が減り，結局残りの二本も食べてしまったので，タマヨさんのたちが変化しているかいないかはすぐには確かめられないことになる。

笹蒲鉾は余りおいしくなかったので，残った袋も，みやげにしないことに決めた。タマヨさんは残り物であるかないかには頓着しないだろうが，食べ物そのものの味にはわがままなのである。

（川上弘美　いまだ覚めず―冒頭）

この作家特有のスタイルと思えるものの，下線を施した部分は，この前後を取り出すと，きわめて作為度の高い文である。これを問題にするのが，外国語を研究することにどんなことがあるのかと問題視されるのを知っている。だがここに一体何が潜んでいるのか。それについては後述。もちろん小説であり，しかも書き出し，その文脈から，なんら問題がないといいうるのが日本人である。文体の嗜好趣味には介入しない。しかしこれを外国語にできるのは日本語人しかいないであろう。

朝から何も食べていなかったので，タマヨさんへのみやげにと小田原で買った笹蒲鉾の袋を一つ空けて，五本のうちの二本を食べてしまった。

これは日本語特有の文体でありかつ，単純な構造が複合して，日本語では意味情報は難渋しながらも解読可能なのは，母語のなせる技である。しかも意味を確認しながら，平静のリズムで読んだ場合に限る。しかしこれが外国人が理解するとなると，殆ど不可能である。それは日本語母語話者の書き手が原稿に筆記道具で書き上げると，かなり単純な意識の流れが現れて，入り込んだ複雑な文には通常なり得ない。そんなことよりここでは，近年の文明の利器である機械筆記道具で書き上げたと思える痕跡がある。それは，書き手の他の部分の隙間の多さからは考えられないほど重層している部分がこの

ところに現れているからである。基本的には，「私は何も食べていなかったから，笹蒲鉾の五本のうち二本を食べた」はずである。こう考えていた時に，「ああそれは，タマヨさんへのみやげだ。小田原で買ったのだ。そのみやげが笹蒲鉾で，袋に入っているのだ。その一つには五本入っている。その袋を一つ空けたのだ。」そして二本食べてしまったのだ。これほどの意識の移動する内容を一つの文に取り込むことが出来る日本語の構造というのは一体どういうことであるのかを問う必要がある。ここには典型的に，途中の事情が肝要なごとく述べ立てていくのであって，事柄が最後に文の述語が現れて文としての安定感を整える。しかし本当は空腹であるから，なんとか空腹を満たしたということを，当然期待したいのだ。なのに，そうはならない。それがこの作家の文体なのだろう。

ハリスはGrammar on mathematical principles 1977で言語に省略過程があるとする，またロシア語の文法書でも場所規定を伴う名詞語結合は基本的に存在動詞の省略とみる。したがって，意識が流れすぎるときにしばしば生じる飛躍と見るのか，言語学的に説明をするのか，あるいは趣味の悪い文だとするのかは，読み手の期待に対応するのである。

アルチューノヴァは「文と意味」で言語の意味と伝達上での論理構成を示した。人は文を用いて存在，命名，特徴付け，同定という手続きを駆使して，論理的に情報伝達が成立するという。文学は論理じゃないのだというのならそうである。しかし存在と存在対象および場所との関連では常に存在が省かれていくという過程をも経ている。「もの」が「存在している」のは「特定場所」だ。これが「もの」「特定場所」という並びで統語が成立する。そして名詞は場所限定を受けるのであり，これが名詞句としての単位，名詞語結合である。そしてここにハリスのいう動詞も省略されて名詞句となるのを加えておこう。

すると「タマヨさんへのみやげにと小田原で買った笹蒲鉾の袋を一つ空けて，五本のうちの二本食べてしまった」というのは，私が「タマヨさんへのみやげに（と）小田原で買った」のは「笹蒲鉾の袋で」あり，「その袋の一つを空けて」「五本あるうち二本を食べた」。つまり私の小田原での買い物，土産＝笹蒲鉾，それは袋入り，あけると五本入り，その二本を食べた，ということである。

タマヨさんは，封が開いて二本しか残っていない袋の混じった笹蒲鉾の包みをみやげにと手渡しても，頓着しないたちである。

私が袋の封を開いて，（私が食べて）（五本のうち）二本しか残っていない。そんな袋が混じった笹蒲鉾の包みがみやげである。本質的にはタマヨさんの性格を規定しているはずである：タマヨさんは頓着しない質である。そう，（みやげに欠陥品をもらっても）頓着しない。では欠陥とは何か：これが先に挙げた笹蒲鉾の包み。これと同定されるのがみやげである。日本語テキストは，かくも話者，書き手の意識の流れを日本語構造に映し込むのである。殆ど分析的にしか外国語には転換できないし，構造上でも段階的にしか表現できない。

では，ロシア語ではどうなのか。ここで取り上げるのは，小説の冒頭部，主人公のモノローグである。さらにここに見る現代人の心的描写は，上に川上弘美の文で見たとおり近年の日本人作家でも同じような文体を使うのが見られる。しかしその異同はどこにあるのだろうか。ここに読み取れる主人公は自閉しており，鬱屈はしているものの，ロシア語構造としては明快である。訳で見るとおり，別段日本語とそんなにかけ離れた構造ではなく，不断に情報が先送りされて，読み手の意識を先へと導く。

В начале мая ударила тропическая жара, жизнь в городе сделалась невыносимой, номер накалялся с одиннадцати часов и не остывал до рассвета, у меня начались одышки, головокружения, одна ночь была

ужасной, и я, промучившись эту ночь бессонницей, стеснением в груди и страхом смерти, к утру смалодушничал и позвонил в Москву. Был девятый час, значит, в Москве седьмой. Я услышал испуганный голос Риты! ‹Что с тобой?› Через секунду вспомнив о том, как я себя вел, она заговорила спокойнее и суше, даже с некой недовольства: зачем звонить в такую рань, если ничего страшного не случилось? Но ведь я позвонил в седьмую часу! После почти двухмесячного молчания. Это что-нибудь да значило. Могло значит — бедствие, желание примириться, раскаяние, тоску, что угодно, и все, вместе взятое. (Ю. Трифонов Предварительные итоги)

五月初め熱帯の暑さはがんがんときて，この町の暮らしは耐え難くなり，部屋は十一時からもうもうとしていた，そして明け方まで冷めず，私は息切れ，めまいが始まり，一夜中恐ろしかった，そして，私は，一晩中苦しみ続けて眠られず，胸のあたりが締め付けられ，死ぬのではないかと恐ろしくなり，朝方になって怖じ気づいて，そしてモスクワに電話した。八時過ぎだった，つまり，モスクワでは六時過ぎ。私の耳にしたのは驚いたリータの声だった。「どうかしたの？」直ちに私の振る舞いを思い出して，彼女の切り出しはぐっと穏やかに，さらに素っ気なくなり，何か不満だと，なんでこんなに早く電話をするのよ，何も恐ろしいことなど起こってないのにさ，と云わんばかりだった。しかし私が電話をしたのは，六時過ぎちがうのかよ。殆ど何も二ヶ月ご無沙汰してからですよ。これは何かきっと訳ありだった。ひょっとして，災難，仲直りの意向，後悔，寂しさ，なんでもいい，そしてみんな一緒くたにしてすべてかも知れなかった。(トリーフォノフ　早まった総括—拙訳)

ここに至り，日本語話者が高度のロシア語能力をもち，直接ロシア語人に向けて発した例を見よう。ここで或るメッセージが他国に発せられるとき発信人のメンタリテイが，あるいは母語の意識が露見し，単刀直入にその真意意図が肯定的に伝わらない例だと考えられる。駐ソ大使の記事（週刊誌「新時代」No34／2004所収）を見てみよう。ロシア国民への友好促進を呼びかける久々のメッセージ。本人の書いたロシア語とそれを母語に翻訳したという記事が在モスクワ日本大使館のホームページに掲載されている。

ДОБРЫЙ СОСЕД ЛУЧШЕ ДАЛЬНЕГО РОДСТВЕННИКА

По работе мне нередко доводится спрашивать россиян и японцев о

том, какими им представляются Япония и Россия. Бывает слышу в ответ: ‹Япония-экзотическая страна страна›, ‹Россия-сказочная страна›. Оба образа, хоть и выражают положительные чувства, но весьма далеки от действительности. И я как человек работающий на передовой линии японо-российскх связей, испытываю от этого некоторое неудовлетворение.

この記事の日本語訳（大使館ホームページより）が次のように示されている。

「遠くの親類より善良な隣人」（ロシア語原文からの翻訳）

私は，仕事柄，よく，ロシア人と日本人に，それぞれ相手国にどのようなイメージをもっているか問うことがあるが，「エキゾチックな国 - 日本」とか「お伽の国 - ロシア」といった答えが返ってくることがある。何れも肯定的な気持ちが表わされているのであろうが現実離れしたイメージであり，日露交流の最前線で働いている私にとっては，いささか不満である。

上に見るように，ホームページでは原文ロシア語，ロシア語より翻訳として掲示されている。しかし読むものからすると，見事なロシア語ではあるが，ロシア語を母語とするものの意識の動きではなく，その根底には日本語を母語とするものの意識が見て取れるのである。しかも第一パラグラフに否定的見解が結末に提示されている（この部分下線は筆者）。これは漱石が行った講演（下に示す）にも，落語でも講談でもある一つの型としての，日本語人の物事の端緒である。本題にはいるまでに，注意を引きつけるとか，かたぐるしさを取り除きたいなどという思いで，かならずこの手の方法を採る。

日本語人には必要であると思えることは，全く不要であるということが多々ある。結局このメッセージではレアリズム加重で，いかにそれが現実であったとしても，メッセージとしての昂揚は余り期待できない。なにが伝わってくるのかと読み始めると，仕事柄や最前線で働いているなど，全くもって不要であることは，筆者駐ソ大使として紹介されているからである。

そして第四パラグラフ目にはじめて希望が表明されるという算段である。しかし否定的表明をした後に遅すぎて，また寧すぎで切なる希望は思いにとどまる日本語のメンタリテイにふさわしい。結局このメッセージは，日本式にかたぐるしい公式論文記事であり，語って訴え説得というところに至るにはロシア語で書いた日本語人と同様のメンタリテイを持つものに伝わると言うべきだろう。

Хотелось бы поразмышлять об отношениях наших стран в следующих четырех аспектах: 1) культурные связи, людские обмены и связи регионов; 2) экономика Японии и японо-российске экономические отношения; 3) место Японии и России в мире; 4) проблема заключения мирного договора в японо-российских отношениях. Посмотрим для начала, как складывается ситуация в сфере культурных связей, людских обменов и связей между регионами Японии и России.

（かかる考えの下で，日露関係を，狭い二国間の利益からではなく，世界的視点に立って，1．文化交流，人的往来，地方交流，2．日本経済と日露経済関係，3．世界における日本とロシア，4．日露関係における平和条約締結問題の4点について考察したいが，ここでは，第1回目として，日露間の文化交流，人的往来，地方交流について考えてみたい。）

次のテキスト断片は同じ週刊誌に大使の記事に先立って25号に掲載された「ロシア人と日本人」という記事である。こちらは日本問題の専門家のロシア語，しかし名字からはグルジア系と見られるので，ロシア語が母語であるかどうかは不明だが，ロシア語人であることは確実である。

Принято считать, что Россия и Япония совершенно разные страны, отличающиеся друг от друга едва ли не во всем. Доля истины в этом утверждении действительно есть. Тем удивительней выглядят параллели, сходные или сопоставимые особенности, сплошь и рядом обнаруживающиеся в общественно-политическом развитии двух стран, равно как и в менталитете двух народов.

（ロシアと日本は全く別個の国で，互いに異なりはするが，おそらくはすべての点においてではないのではないか，とされている。このように言うのにはいくばくかの真実は確かにある。もっ

と驚いてしまうのは平行するところがあって，似ているとか真反対であるにしても，それが至る所で二カ国の社会政治面で明らかになっており，ちょうど二国民のメンタリテイにも現れているのである。） 拙訳。

こんな風に切り出されていると，読むものを引きつけ，関心を先へと導くのである。内容に対して価値判断を先送りし，メッセージを読もうとするのである。まさにこの点にこの両者のメンタリテイの差異がレトリックに現れている。日本人のメッセージは，上に書いたように，次の明治時代の講演原稿から同様の端緒がある。しかし，先のものとは異質で，ここには明らかに語りかけるという姿が見える。あるいは論文と母語による語りかけの差異であるかもしれない。

「私はこの地方にいるものではありません，東京の方に平生住（スマワ）っております。今度大阪の社の方で後援会を諸所で開きますについて，助勢をしろという命令ーだが通事だか依頼だかとにかく催しに参加しなければならないような相談を受けました。それでわざわざ出て参りました。」云々。（夏目漱石―中味と形式―明治四十四年八月堺において述―冒頭）

同様の文法，レトリックは日本語人風。これは母語が同じものには理解できるが，そのままのスタイルを露語で行うと，ロシア語人にはいつ本題が始まるのか，なにか隔靴掻痒の感がある。

この差異は直截さ単刀直入であるか否かということであり，問題の本筋に入るまでの意識の共同化に力を入れる日本人の通常のあり方，挨拶である。たとえば，寄席における落語家の枕と言われる部分である。このメンタリテイは広く日本語人の感性に組み込まれているのである。しかしロシア語人にあっては，賛同，異議など予想されるにもかかわらず，本人のメッセージとしての日本語人ロシア語人の似ている，似ていない両方の質を述べるのである。また単刀直入といっても，明快さであり，幅を持っている。一方的不満を最初に，あのあえて苦言を呈する型ではないのである。似ている，正反対といって，すべてを包括しながら論を展開するという手法，さらに結局は見事などんでん返しというアートを持っているのである。

見事な日本語であっても，ロシア語であっても，やはりある種の昂揚した気分をもたらすものがメッセージであって，単純にレアリズムであっては読むのを拒否するものも出てこようというものである。では何が必要なのか，日本語はロシア語に直結するのか。ここでロシア語人が英語に移った場合を見てみよう。

ブローツキイはおそらくナボーコフの後塵を拝す，著名な露語話者詩人としての英語作品である。何の苦なく英語で書けるというのは，本人の母国で学習歴，翻訳という使用歴があり，客観的には露語と英語の構造の近さであり，又物理的には居住地の言語環境のせいである。どうして本人がことさらに母語たる露語で書かなかったのか。おそらくは時代性ということ，広範な露語読者など存在しない，英語しか流通しない異境にあったから，単に英語で書く義務が生じたのであろう，母語ではなかったのだ。異境に外国人として暮らしたのである。訳者に任された母語たる露語はいったいどこが問題になろうというのか。

Many moons ago the dollar was 870 lire and I was thirty-two. The glove, too, was lighter by two billion souls, and the bar at the stanzione where I'd arrive on that cold December night was empty. I was standing there waiting for the only person I knew in that city to meet me. She was quite late. J.Brodsky Watermark

Много лун тому назад доллар равнялся 970 лирам и мне было 32 года. Планета тоже весила на два миллиарда душ меньше и бар той stazione, куда я прибыл холодной декабрьской ночью, был пуст. Я стоял и поджидал единственное человеческое существо, которое знал в этом городе. Она сильно опаздывала.

И.Бродский Набережная Неисцелимых (пер. *Г.Дашевского*)

いく月も前に一ドルは八百七十リラ，そして私は三十二歳であった。地球の重みもやはり二十億人分今より軽かったのだ，そしてこのバーは，スタンツイオーネ（駅）にあるが，ここへ私が寒

い十二月の夜に到着したのだったが，人気はなかった。立ち通し私の待っていたのこそ，この町で私が知っていた唯一の人間だ。彼女はひどく遅れてきた。（ブローツキイ，「癒やされぬものの岸辺通り」—露訳文より重訳，拙訳）

ここではロシア語人が英語を操る環境で作品を書いた。そのときの母語の干渉がどう現れたのか調べてみたい。大本には当然母語意識を制御解き放つことが完全にはないのであろう。さらに単純に many months ago としないのは詩人の才能がさせたのか，拘泥的にロシア語 много месяцев をそのまま英語にしたのか。この異なるはずが同じであるが故に，異文化での意味づけを他者に考えさせる。ロシア語には月が месяц/луна が語彙としてあり，何ヶ月と数える時には前者を用いるのである。また単純な the only person も，ロシア語訳ではいかにも意味ありげに единственное человеческое существо（唯一の人間存在）と訳している。ここに詩人と訳者の精神の共同性があるのだ。書き手の故郷のロシア語人がこれを深く推察して，原作通り後者を用いたのであろう。さらに訳者はタイトルにまで原作者の意図を深くくみ込んでいる。そして詩的な原作の題が訳者によって感傷的な題になっている。いかにもロシア語人が飛びつきそうに妙である。また本人がこれをロシア語で書かなかった意味もここに潜んでいる。そうすると言語を切り替えてさせられて，異境で浮かび上がった意識を見事に流通させているということになる。興味深い現象は次稿に譲ることにする。

日本語人のテキストをみて，そのメンタリテイを日本語構造によって組み立てあげる型をみてきた。そこでは単一文を言い切るというのではなかった。すべては，一つの意識の動きを一纏まりのテキストを単位にするような傾向が見られた。それを支えるのが接続形であり，格助詞と名詞化による繰り込み構造とも云いうる姿があった。これこそが日本語人の母語意識であった。それから造出される文体は多様を極め，そこに個性が表れているのである。しかし母語意識が外国語たるロシア語に現れた一例ではその根底にどうしよ

うもない母語意識であった。

このような日本語人の制約を克服するのにロシア語人の英語文化圏での創作文体をみた。彼らには英語は非母語であっても基本的な構造上，また語彙的，表現的類縁性もちあわせており，彼らの異言語への対応には日本語人の複雑な対処からいえばかなり労苦は軽減されたものになっている。しかしメンタリテイの発現から云えば母語にしくものはないのである。日本語人の意識をくみ上げる母語から対象言語への音声・語彙の非対応からいえば考え直さねばならない要素が多いのである。

外国語の素養のある明治の作家の明快な文体はまさに現代に流通するべきものであろうし，この母語文体を持てば外国語に明晰に現れるものと思われる。この母語を明確に腑分けをして，外国語構造に転換できるとき，見事な外国語使いになりうる可能性があるのである。最重要であるのは，言語の線条性という普遍性である。日本語がいかに表意文字言語であっても，漢字構成組み合わせによる名詞化とその結語手段たる格助詞によって構成される構造の基に印欧語とも同じ構成を看取ることができるのである。その根本にカルツェフスキイの被限定項Tと限定項T'の関係が語形レヴェルから，その進展ポテンシャルとして現れているのである。さらに文構造ということになるとゾーロトヴァの陳述形態としての限定される項と限定する項が現れ，それに自由統語素が結合されていき，それが単位となり，テキスト構成へと至るのである。また70年および80年のアカデミア文法でも記述される文構造，文の核と文の拡大子との組み合わせがまさに出発点となっていくのである。次稿ではさらに母語意識の遮断とそのときの言語表現をみて，さらにロシア語人による日本文学の翻訳にみる意識現象の確定を参考にして，日本語人のロシア語へのアプローチを検討することにする。

参考文献

Грамматика современного русского литературного языка, М. 1970

Русская грамматика Т. 2. М. 1980

Русская грамматика Т. 2. Praha, 1979

Н.Д.Арутюнова *Предложение и его смысл* М. 1976

А.В.Бондарко *Функциональная грамматика*, Л. 1984 拙訳　ボンダルコ　機能文法(1998)

Исследования по языкознанию, К 70-летию члена-корреспондента РАН Александра Владимировича Бондаро, СПб 2001

Г.А.Золотова *Коммуникативные аспекты русского синтаксиса* М. 1982

Г.А.Золотова *Синтаксический словарь* М. 1988

Г.А.Золотова　Говорящее лицо и структура текста// 《*Язык-Система, Язык-Текст, Язык-Способность*》, М. 1995

Г.А.Золотова, et al *Коммуникативная грамматика русского языка* М. 1988

Язык, культура. *Гуманитарное знание Научное Г.О.Винокура и современность* М.1999

Г.А.Золотова, Грамматика как наука о человеке//Русский язык в научном освещении No.1 2001 РЯИРЯ

А.Е.Кибрик, *Очерки по общим и прикладным вопросам языкознаия*, М. 1992

Ю.С.Степанов *Имена, предикаты, предложения* М. 1981

С.И.Карчевский *Повторительный курс русского языка* 1928 М.-Л.
拙訳　カルツェフスキイ　ロシア語復習課程(1997)

С.И.Карчевский *Из лингвистического наследия* М. 2000

С.И.Карчевский *Из лингвистического наследия II*　М. 2004

石綿敏雄，高田誠　対照言語学　1990 桜楓社

橋本進吉　新文典　上級用　全　1934 富山書房

坂倉篤義　日本語表現の流れ　岩波セミナーブックス45　1993 岩波書店

田中克彦　クレオール語と日本語　岩波セミナーブックス77　1999 岩波書店

山田孝雄　日本語口語法講義　1939(11)　宝文館

Harrris, Z.S. Grammar on mathematical principles in *Papers on Syntax* (=*Synthese Lnaguage Library 14.*) editied by H. Hi Hiž, 1981 Dordrecht

---

Ю.Трифонов Собрание сочинений Том второй Повести М. 1986

Венецианские тетради *Иосиф Бродский и другие* М. 2002

蓮見重彦　反＝日本語論　ちくま文庫
川上弘美　おめでとう　新潮文庫 7190
町田　康　夫婦茶碗　新潮文庫 6659
町田　康　つるつるの壺　講談社文庫 ま46
樋口一葉　十三夜，われから　岩波文庫 1766
森　鴎外　山椒大夫・高瀬舟　新潮文庫 1791
夏目漱石　漱石文明論集　岩波文庫 31-011-10

参照サイト

http://www.newtimes.ru/artical.asp?n=3052&art_id=5397
http://www.ru.emb-japan.go.jp/jrr/nomura_novoevremya.htm
http://www.newtimes.ru/artical.asp?n=3038&art_id=5017